

キャンパスライフサポート室に求められるもの（第3報） — 想定事例の視座にもとづく臨床心理学的支援の可能性 —

薄木 佳苗¹⁾・山倉 辰裕¹⁾・村松 公美子²⁾・熊谷 綾子³⁾

1) 新潟青陵大学キャンパスライフサポート室

2) 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究科

3) 新潟青陵大学健康管理センター

キーワード：キャンパスライフサポート、連携、事例

Roles Required for a Better “Campus Life Support” — Prospective Support From A Clinical Psychotherapist’s View Based on Three Fictional Cases — The third report

Kanae USUKI¹⁾, Tatsuhiko YAMAKURA¹⁾, Kumiko MURAMATSU²⁾, Ayako KUMAGAI³⁾

1) Campus Life Support Room of Niigata Seiryō University

2) Graduate school of Niigata Seiryō University, Department of Clinical Psychology

3) Health center of Niigata Seiryō University

Key words : Campus Life Support, Cooperation, Fictional Case

1. はじめに

筆者らの勤務する大学では、2009年7月、文部科学省「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラム（学生支援GP）に「新潟青陵トリプルサポートプログラム」が採択され、その3本柱の一つとして平成2009年10月より、キャンパスライフサポート室が学内に設置された。第1報（2010）、第2報（2011）では開室から2010年、平成2011年前期までの取り組みを紹介するとともに、学生を対象としたアンケート調査をもとにキャンパスライフサポート室に求められる役割を考察し報告した。その中で、どこに相談すればいいのかわからないという学生が多い中、門戸を広く持ち様々な相談を受け入れる①「何でも相談窓口としての機能」②「キャリア発達支援の充実」③「グループワークによる支援」の3つの機能が有効であることが示唆された。

2007年日本学生支援機構「大学における学生相談体制の充実方策について」では、総合的な学生支援と専門的な学生相談の連携・協働において教員、事務系職員、カウンセラーの三者それぞれの役割尊

重と協働によって、広く学生全体を支えることが可能になると報告されている。そこで、本稿では第一報、第二報に続きキャンパスライフサポート室での取り組みについて報告するとともに、実際に経験した事例をもとに作成した想定事例を用いながらキャンパスサポート室とキャリアサポートステーションとの連携、アドバイザーとの連携、保健管理室との連携、学生相談を担当する教員との連携とはどのようなものかについて考えてみたい。

また、思春期から青年期は、アイデンティティーの確立に向けて模索する時期と言われるが、独立行政法人日本学生機構（2007）は「自分とは何者か」という問いに考え悩む道を進んで行くためには、言葉を使って考える力が必要であるとともに、ばらばらの自分を1つのまとまりとして受け入れ抱えてくれる他者が必要であると述べられている。そこで、キャンパスライフサポート室において実際に経験した事例をもとに作成した想定事例を用い、キャンパスライフサポート室として独自の視点として「学内で孤立している学生への安心する居場所の提供」「大学生のアイデンティティー形成についてのサ

ポートのあり方」「枠の重要性」の3点を取り上げ、それについて考察してみたい。

Ⅱ. 本学でのキャンパスライフサポート室の現在の主な取り組み

1. キャンパスライフサポート室の利用状況

キャンパスライフサポート室は2009年10月より開設され、現在は非常勤カウンセラー（臨床心理士）2名、週に4日、4時間30分、月曜のみ7時間の開室で運営している。利用の仕方としては、開室時間内で、相談中でなければいつでも利用して良いことになっている。グループで心理検査を受ける場合を除くと、個人の相談として来室することが多い。利

用状況も年々増加傾向であり、相談件数は2012年度前期ですでに210件の利用件数があり、昨年度の倍のペースで増加している。その中でも心理検査は2012年度前期で95人の利用者があり、心理検査のニーズがあることが明らかになった。（表1）

また、通常の相談の他に「何でも相談」としての機能をもつための取り組みも行っている。どこに相談すればいいのかわからない学生に対し窓口をひろげ気軽に様々な相談を出来るようにするために、相談室から外に出て学生ホールでの出張相談を行っている。さらに、「YGテストを受けてみよう」「自分の気持ちを伝えてみよう」「自分を理解し、就活や生活に役立てよう!!」というタイトルで年に数回グループワークを実施している。（表2）

表1 キャンパスライフサポート室における相談件数内訳2010年4月～2012年8月

集計期間	2010/4/1 ～2011/3/31	2011/4/1 ～2012/3/31	2012/4/1 ～2012/8/31
開室日数	200日	173日	67日
利用人数	82人	120人	123人
相談件数	131件	201件	210件
人間関係（友人、家族、クラブ）	19件	20件	15件
心理・性格（性格、適性）	35件	49件	39件
進路・就職（適性、就職、進学、将来）	23件	29件	17件
学業（履修、実習、資格）	7件	4件	4件
体調（倦怠感、いらいら、不安など）	8件	17件	9件
職業検査希望	1件	12件	2件
心理検査希望	16件	57件	95件
その他	16件	13件	29件

表2 キャンパスライフサポート室の企画一覧

日程	タイトル	内容	参加者
2010年8月	『出張サポート室』3日間	出張相談	0名
8月	『YGテストを受けてみよう』3回	グループワーク	12名
10月	『自分のことを知って、色々な人と関わってみよう』	グループワーク	2名
10月	『自分を理解し、就活や生活に役立てよう!!』	グループワーク	0名
11月	『就職・学生生活何でも相談』3日間	就職課合同出張相談	4名
2011年1月	『先輩たちはどうやって就活したの?! ～就活方法編～』	就職課合同セミナー	14名
1月	『自分を知ることからはじめよう～自己理解編～』	就職課合同セミナー	19名
5月	『自分を理解し、就活や生活に役立てよう!!』	グループワーク	4名
6月	『自分の気持ちを伝えてみよう!』	グループワーク	1名
6月	『出張サポート室』2日間	出張相談	2名
7月	『夏休み直前! 就職活動セミナー』4日間	就職課合同セミナー	7名
5～8月	『YGテストを受けてみよう』8回	グループワーク	17名

2. 多職種との連携

キャンパスライフサポート室は主に健康管理室、キャリアサポートステーション、アドバイザー、教員、学生相談を担当する教員との連携体制をとっている。

健康管理室からは身体的な不調を訴え健康管理室を利用した学生の中で、メンタル面でのサポートを必要としている学生に対し、キャンパスライフサポート室での相談を行っている。

独立行政法人日本学生機構（2007）は、進路・就職問題に関して、学生によっては、カウンセリングを通じて内的な成熟を促進したり、性格や適性の吟味をすることが必要であり、キャリアセンターが学生相談機関と連携を行っていく必要があると述べている。進路が漠然としている学生、就職面接での自己PR点を検討したい学生などに対して、職業適性検査や心理検査をキャンパスライフサポート室で受けられることをキャリアサポートステーションより伝えてもらっている。さらに、キャリアサポートステーションからの予約を入れる際には、2011年4月に設置されたトリプルサポートプログラム専用の共有ファイルサーバーを通して行える。逆に、キャンパスライフサポート室に来室している学生の中で、就職活動をしたいが具体的にどう動けばいいのかわからない学生に対しては、まずはキャリアサポートステーションへ行ってみて自分が興味がある職業の情報を自ら調べることから始めるよう促している。

アドバイザー、教員、学生相談、担当教員との連携に関しては、キャンパスライフサポート室に来室した学生の中でアドバイザーへ報告しておいた方がいい場合は学生の許可を得てから報告をする。病態が重く自傷他害の恐れがあるものについてはアドバイザーへ報告をして医療機関への受診を勧めるなどの対応をする。また履修についての相談、実習や授業に関する不安などについてもアドバイザーもしくは場合によっては学生相談へつないでいる。

3. 心理テスト

キャンパスライフサポート室では相談の他に、心理テストを行っている。先に述べたように、2012年度前期では前年度よりはるかに多い心理検査の希望者がいた。キャリアサポートステーションから紹介されて心理テストを受ける学生、個人でキャンパスライフサポート室へ直接来室し予約をとる学生、友人同士複数で申し込む学生など心理テストを受ける形態は様々である。主な動機としては「自分の性格について知りたい」「就職面接で自分の長所短所をどのように話せばいいのかを知りたい」といったものである。

心理テストの結果を出した後、自分がどのような傾向があるのか、予想外の面があったのか、その傾向はどんな場面で出やすいか、友達同士で受けた場合は友人から見てどう見えるか等について、心理テストをきっかけに「自己理解」につながることを念

【心理テスト終了後の感想（そのまの抜粋）】

・自分が自分のことをどのように感じているかがわかったような気がした。好き嫌いや、自分なりの思いや考えがあり、自分中心で動いて良いのか考えさせられた。
・今の自分の状況がとても表れていて驚き、これが試験に出ると思うと不安になった。もう少し気持ちが落ち着いてからもう一度受けてみたい。ありがとうございました。
・今自分が安定した状態でいられていることがわかり、安心したと同時に就職試験までにその状態でいられるのかと少しだけ不安にもなった。でも、今の自分の状態を客観的に見れて良かった。ありがとうございました。
・自分の性格について知ることが出来て良かったです。知らなかった自分の性格も理解でき良かったし、気づけて良かった。
・初めてY Gテストを受けた。質問の結果もそうだが、答えている時に自分について考える事が多かった。楽しかった。これを踏まえて、自分を見直そうと思った。
・最近悩みが多かったので、抑うつが強いと一目瞭然だったので少し驚いたが、しっかり息抜きして行こうと思った。ありがとうございました。
・今の自分の性格について知ることが出来、不安なども見えて来て、どこを改善していけばいいかわかることができて良かった。
・自分の事を少しわかった気がした。Y Gテストを受けて良かったと思う。話しやすかったので、不安な時や辛い時に来たいと思った。
・当たっている所が多くて驚いた。再度受けてどのように変化するのか少し楽しみ。

頭に置き、相談員も一緒に検討する。また、現在不安に思ったり問題を抱える学生にはそのこととテスト結果を関連付けながら結果を見ていく。学生の反応としては、大半の学生が受けて良かったという感想であった。

Ⅲ. 事例

キャンパスライフサポート室において実際に経験した事例をもとに作成した想定事例を用いて、どのような臨床心理学的支援が可能であるか検討を試みる。

1. 事例A（女性）

キャリアサポートステーションより心理テストの予約が入り、4人の学生と一緒に検査を行う。他の3人はすでに資格を生かして就活をはじめの心構えが出来ている様子だが、Aだけが暗い表情でテスト後のディスカッションもほとんど発話がない。終了後でAより「個別に相談にのってほしい」と声をかけられ個別面接を行った。

「就職するか進学するかを相談したい」と緊張した表情で来室。小学生の頃よりやりたいことがあり専門学校も考えたが、親からは大学へ行くように言われたために現在の大学へ入学した。周りが就活について動き始めている中、一度は断念したものの専門学校へ行きたいという思いが強くなってきた。しかし、父親にそのことを言い出せずどうしたらいいのかわからないと泣きながら語る。

それから約半年後、「専門学校へ行くことに決めました」と来室。親も「好きなようにして良い」と応援してくれている。持参した専門学校のパンフレットを見ながら話し合う。また作文や書類を出さなくてはならず少し心配とも話し、アドバイザーに見てもらうことを提案すると、「そうしてみようかな」と答える。前回と全く異なり生き生きとした表情で語る。

数か月後、報告が遅くなってすみませんと笑顔で来室。専門学校も決まり新しい環境への支度をしているが、今は楽しみと不安の両方を話すものの生き生きとした話し方。また、あの時自分の気持ちを父親に話すことが出来て良かったと語る。

(1) 青年期アイデンティティー・ディフュージョン（自己同一性拡散）への支援

思春期から青年期にさしかかる時期は、アイデンティティーの確立に向けて模索する時期と言われる。Aの場合、心理テストをきっかけに自分の本当にやりたい事について再考する機会となった。もともとAは自分のやりたいことがあるが、経済的な事を理由に親へ言い出せず、就職か進学かどうかすばいいのかわからない状態であった。

話し合っているうちに、専門学校で勉強した場合に卒業後の具体的なビジョンへまでは発展させる事が出来ていないことがわかった。しかし、やりたいことをやっている将来の自己像を専門学校のパンフレット等をみながら相談員と一緒に検討しイメージを広げる作業をすることにより、明確な将来のビジョンが見え、父親へ自分の言葉で気持ちを説明するという具体的な行動に移すことが出来たと考えられる。しかも、相談員が決めるのではなく、本人が迷い悩んだ結果の行動が自己決定へとつながった。

このようにキャンパスライフサポート室では、本人が抱える問題に対して「やめておいた方がいいのでは」等の指示を与えるのではなく、本人の迷いや踏みとどまる理由などを丁寧にきき、本当はどうしたいのかについて一緒に検討する。そして、具体的にどうして行けばよいのかを考え、励まし、サポートをしながら学生の自主的な行動へ移るのを待つことが自信へと繋がると考えられる。Aの場合は迷いに付き合っただけで、その後は自己決定し自身で行動することができた。そのことから、真剣に自分の進路について悩む力があつたからこそ、ほんの少し背中を押すだけで前に進むことができたと考えられる。

(2) キャリアサポートステーションとの連携

友人4人でキャリアサポートステーションへ行ったのがきっかけでキャンパスライフサポート室へ繋がった。他の3人は就職面接でのPR点を検討することが目的だったが、Aは他の友人とは異なり1人どうすばいいのかわ迷っていたが、Aのみが自主的にキャンパスライフサポート室へ相談目的では来ることは出来なかったと思われる。就職面接という現実的な支援をきっかけにしてキャリアサポートステーションへ友人と一緒にいく事が出来たからこそ、キャンパスライフサポート室での内的な相談へ繋がったと考えられる。

2. 事例B（女性）

泣きながら開室終了時刻近くに来室する。演習

中、真面目に取り組まない学生をBが注意したところ、逆にBがのけ者扱いにされてしまった。その事を教科担当教員に話すと「細かい事を気にしすぎではないか」と言われたという訴えを「どうせ自分なんて認めてもらえない」と話しながら号泣する。また他の日には「自分はひとりぼっちだ。誰からも相手にされない」と大声で泣きながら来室し、いつも一緒に行動を共にしていた友達より少し距離を置きたいと言われたと泣きながら話す。終了時間ぎりぎりに飛び込んでくることが多いため、＜時間を過ぎていたので別の日に＞と言うと「ここは学生のためにある場所ではないのか」と捨て台詞を吐いて去っていく。大学事務へも頻繁に顔を出しては、授業への不満を言うて帰るということが多く職員の間でもどのように対応すべきか苦慮している学生だった。

＜落ち着いている時にあなたの話を聞きたいので定期的にここに来ないか？＞と誘うと了承し、毎回予約をすることに。面接がスタートすると予約をした日は約束通りに来室する。何度か見せた感情をコントロールできずパニックになっている様子とは異なり、落ち着いて話せることがわかり、Bの大学生活についての不満や訴えを聞いた。次第に、これまでは自分本位の発言から徐々に日常の学生生活の中の場面でのエピソードを話すようになった。その中で、「もしかしたらあの人はこう思っていたのかもしれない」と相手の気持ちを推測するような発言が増えて行った。またトラブルがあると泣きながら予約外で来室することが数回あったが、「今の時間空いていますか？」とこちらの予定を確認したり、配慮するといったような言葉も出るようになる。キャンパスライフサポート室の外でも変化が起きており、対人トラブルが少なくなり友人も何人かできたことも報告されるようになって卒業となった。

(1) 安心できる場所の提供

Bは高校の頃より対人トラブルを起こしやすく、大学入学後も友人、大学教員、職員とトラブルを起こしてはその度に孤立するパターンの繰り返しだった。「だれも自分を認めてくれない」と泣き叫ぶBは、どこに行っても集団の中に入れず、自分の存在を認めてくれる場所を必要としていた。Bは周りの仲間や大人を責めることが多かったが、その内容は元をたどると「自分のことを認めてほしい」というものであった。まずはキャンパスライフサポート室ではBを責めるのではなくきちんとBの話を聴く場所

あること、そして安心できる場所であることを受け入れてもらえるようにした。

(2) 枠の設定

Bは最初の頃は閉室間際に来ることが多くキャンパスライフサポート室は「何かあると泣きながら駆けこめる場所」であった。しかし予約をして来室することになり、「自分の話しをするために行く場所」として自主的な来談目的へと変化することになる。実際、Bは予約を忘れず、毎回きちんと約束を守った。その代わり、枠の中であればBの話しをしっかりと聴くことでBとの約束をこちら側も守られたことになる。社会の中では自分の思い通りに出来ず一定のルールにのっとって行動しなければならない。そのことを考えると枠の設定は社会のルールと同じであると考えられており、Bは次第に「今の時間は空いていますか？」と相手の立場を思いやる発言が増え、枠というルールを守るようになってくる。そこから派生して、学生生活の中でBを取り巻く周囲への関心が少しずつ見え始めてきた。

3. 事例 C (男性)

フラッと来室し、何も話さない状態が20分程続いた後「自分なんて死んでしまえばいい」と口にする。そのまま退出しようとしたため、もう一度来るよう説得し次回の約束を何とかとりつけた。一週間後「予約をしたから一応きた」と来室。とても辛そうに見えるが何か力になれることはないか質問すると、ポツリポツリと話し始める。高校の頃より自分の名前を複数の人の声で呼ぶのがきこえていたこと、電車で飛び込もうとしたことがあるなどが語られる。大学ではなるべく明るくふるまうように心がけているが、現在も眠れず幻聴が続いているとのこと。体のためにも病院へ行くことを勧めるが、親に話したことがなく、そのため病院受診も出来ないと言う。この回でアドバイザーと健康管理室へは情報を伝えてもいいと本人の了承は得る事ができた。

この面接の後、健康管理室、アドバイザーと情報の伝達と今後の対応を検討する。アドバイザーからも本人に病院受診をすすめるが拒否が続き、最終的には保護者へ連絡をして受診へと繋がった。

(1) アセスメント

深刻な悩みを抱えており、学生生活に重大な支障をきたしている場合、例えば、孤立、悩みや不安が

強く、暴力や自殺未遂などの危険な行動化の恐れ、強い身体的・精神的苦痛があり学生については医療機関の受診が適切である。このような学生への対応としては、健康管理室、アドバイザーへ連絡することになっている。Cの場合は希死念慮があり早い段階で医療機関の受診の必要性があると判断された。

(2) アドバイザー、健康管理室との連携

学生の問題がどの程度かのアセスメントを行い、必要がある場合にはアドバイザー、健康管理室等へ情報を共有してもよいか学生の上承を得る。中には、授業に関わる内容についての相談は評価を気にし、アドバイザーや授業担当の教員へ言わないでほしいという学生もいる。Cの場合、希死念慮があり危機的な段階と判断したもののなかなか受診には繋がらなかったが、アドバイザーとのスムーズな連携を取ることで情報共有、保護者への連絡、医療機関への受診へとつながることが出来た。

(3) フォローアップについて

アドバイザーから授業担当の教員へ連絡をし、授業中など何か変わったことがあれば様子などの報告をしてもらう。また、受診後も学生生活においてさまざまな問題が予想される。何か困った事などがあればいつでもキャンパスライフサポート室で相談することが出来ることを本人へ伝える。病院、アドバイザー、健康管理室、キャンパスライフサポート室など相談できる場所を何か所か作り、本人が孤独にならないように配慮する必要があるのではないかと考えられる。

Ⅳ. 考察

1. 連携

キャンパスライフサポート室では健康管理室、アドバイザー制度、担当教員による学生相談、キャリアサポートセンターなどの学内支援体制におけるコーディネーターとしての機能をもっており、様々な機関への連携の役割をもっている。

健康管理室で身体の訴えの中には自分の悩み等の心理的な問題が隠れている学生、また身体の問題として訴える方が助けを求めやすく健康管理室へ繋がりがやすい学生もいる。また逆にキャンパスライフサポート室に来室した学生の中には身体のケアが必要な場合や、医療機関の受診が心理的な問題よりも

優先される場合などには健康管理室看護師と連携をとり、健康管理センターから医療機関への受診を進める。

また、学生の中には「入学したものの自分の進路はこれでいいのだろうか?」「予想していた授業とは違うようだ」など進路への迷いや授業についての内容はアドバイザーや学内の教員へ話し難いと感じる学生にとっては、キャンパスライフサポート室の相談員は、利害関係が薄いことから、相談がしやすくなる。また、相談員は、来談した学生の話を聴き、本人の同意が得られた場合は、授業内容や資格等に詳しいアドバイザーや担当する学生相談の教員へ連絡をとり、どのような点で学生が困っているのか、またどうしたいと思っているのか等必要な情報を伝え連携をとることで、学生が教員とより具体的な話ができるようになる枠組みづくりを行う役目を担う。さらに相談員は、「～しなさい」「こうすべき」とアドバイスを一方的にするのではなく、相談者の気持ちの揺れを聴き、どのようにすればいいのかを、相談者の「目線」で一緒に検討しながら、寄り添う「伴走者」のような機能を持っている。学生は、キャンパスライフサポート室の相談員に話すことにより、浮遊している様々な自分の内面を整理することが可能となる。次の段階としてより具体的に現実的な支援をするキャリアサポートステーション、アドバイザーに、相談員がコーディネートすることにより、学生がよりスムーズにステップアップを踏むことが可能となる。

2. 悩む力

独立行政法人日本学生機構（2007）は、大学生のアイデンティティー形成のために必要であるものの、現代の育ちの過程で十分に育まれていない能力として、①考える力＝悩む力＝言葉の力、②人とつながる力、③自己肯定感の3つを挙げている。事例Aでは専門学校で学びたいと考えていたが、その気持ちを親へ伝える行動へは移せずにいた。しかし、専門学校についての検討や将来のビジョンについて話し合い思索を重ねるうちに、親へどう説明すればよいかという言葉の力が生まれていったと考えられる。Aは「自分の本当にやりたい事は何か」と考えていたからこそ他者へ相談するという行動に移ることが出来た。そして、Aはもともと悩む力がある学生であったと考えられ、キャンパスライフサポート室で話した後はほんの少しの後押しで自ら先へ進むこと

が出来た。また、父親と話しやすくなったと語っていることから、悩みながら自分自身や親への説得の言葉を探し、相手へ伝えられたことによって人とつながる感覚も体験することができたと考えられる。

事例Bでは面接を始めた最初の頃は自分の中に不安を抱えきれずに泣き、周囲への不満を外へ出していたが、定期的に来室し始めると自分の言動を振り返るようになり、次第に客観的に自分についても考え始めるようになる。

また、日本学生相談学会では、現代の育ちの過程では自分について考える機会が非常に乏しいとされており、心理テストの希望者が大幅に増加したことは「自分は何者か」という課題に向き合うことに関心をもつ学生が多いということが予想される。そして、心理テストを用いたディスカッションはそういった課題へ向き合う一つのきっかけになっていると考えられるのではないだろうか。

3. 居場所作り

キャンパスライフサポート室ではグループワークなど集団での教育心理の側面も重要視しているが、個別相談のニーズが高い。個別相談の学生は事例A、B、Cのように自分と周囲に違和感があり、グループ行動をすることが多い学生生活になじめていない状態でキャンパスライフサポート室へ来室する。そういった集団からはみ出してしまった学生の居場所としての存在も大切な役割と言える。日本学生相談学会によると、何らかの理由でグループに入れなくなり、1人で昼食を食べる姿を周囲に見せたくないと言え、学生、昼休みを1人でどう過ごせばいいかと考え込んでしまう学生がおり、そのような学生が目立たずに1人で過ごす場所としての学生相談の役割も大切であることを述べている。その際に注意する点として、場所があるから学生が来るのではなく、その場所にいる人や雰囲気によって惹かれて集まってくると強調している。

V. おわりに

本稿では架空事例を用いてキャンパスライフサポート室での取り組み、また連携についての若干の考察を加えて報告した。連携の重要性、そしてキャンパスライフサポート室の役割について報告をした。第1報、第1報の「何でも相談窓口」「キャリア発達支援の充実」「グループワークによる支援」

に加え、本稿では「連携」の重要性を唱えた。具体的な連携を挙げてみると、キャリアサポートステーションでの現実的な外的な支援とそこへ至るまでのプロセスの準備段階であるキャンパスライフサポート室での内的な支援のどちらも必要なことが考察された。また、教員には話しにくい内容である場合は、教員ではないキャンパスライフサポート室での相談を経て、実際の履修や授業に関わるアドバイザーや教員による学生相談へと繋げていくことが大切である。

さらに、キャンパスライフサポート室の独自の機能としては、孤立する学生へ安心出来る居場所の提供、アイデンティティー形成における迷いながら進んで行く自分を受け入れ抱えてくれる場所などが考えられた。また、その中で基本的な事ではあるが改めて枠の設定やアセスメントの重要性について想定事例を通して報告と若干の考察を行った。

今後はどのような居場所であれば利用者が安心していられるのか、キャリア発達支援の充実について具体的に模索し続ける予定である。

VI. 文献

- 日本学生支援機構（2007）：大学における学生相談体制の充実方策について―「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」― 9-10
- 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会[編]（2010）：『学生相談ハンドブック』学苑社、33-34、92
- 下山晴彦・森田慎一郎・榎本真理子 編（2012）：『学生相談 必携GUIDEBOOK 大学と協働して学生を支援する』178
- 岡田淳子・山倉辰裕・薄木佳苗・村松公美子・熊谷綾子（2010）：キャンパスライフサポート室に求められるもの―臨床心理士の立場から―（第1報）『新潟青陵大学大学院臨床心理学研究4』33
- 山倉辰裕・薄木佳苗・花村知子・村松公美子・熊谷綾子（2011）：キャンパスライフサポート室に求められるもの―臨床心理士の立場から―（第2報）『新潟青陵大学大学院臨床心理学研究5』